イーナ=マリーア・グレヴェルス「ジェンダーから見たフィールドワーク ―― 文化的営為としてのパフォーマンスにおける男と女と人間」(1997)

Fieldwork from The Perspective of Gender: Men, Women, and Human Beings as The Cultural Activities

［原題／ドイツ語］Ina-Maria Greverus, *Performing Culture. Feldforschung männlich – weiblich – menschlich*. In: Christel Köhle-Hezinger, Martin Scharfe, Rolf Wilhelm Brednich (Hrsg.), Männlich. Weiblich. Zur Bedeutung der Kategorie Geschlecht in der Kultur. 31 Kongreß der Deutschen Gesellschaft für Volkskunde, Marburg 1997. Münster u.a. [Waxmann] 1999, S.75–98.

河 野　　眞（訳）

KONO Shin

愛知大学国際コミュニケーション学部

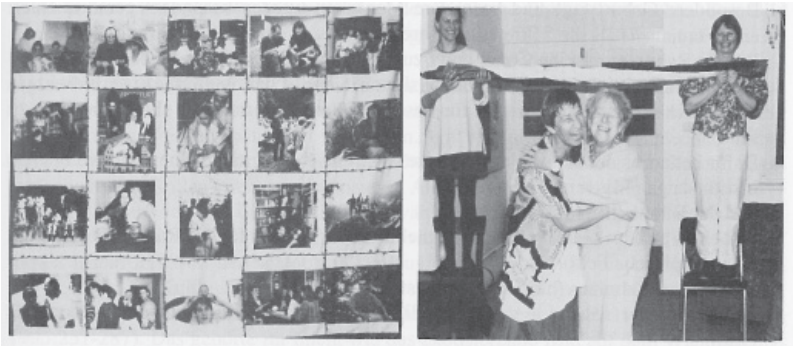
Faculty of International Communication, Aichi University

E-mail: takakons@vega.aichi-u.ac.jp

Abstract

This paper is a translation of the presentation by Ina-Maria Greverus, ex-professor of Frankfurt am Main, Germany, at the German Folklore Society General Conference held in Marburg in 1997. In her lecture, she examined the best-known fieldworker, Bronislaw Malinowsiki, and Utz Jeggle, professor in Tübingen, who criticized Malinowsiki. Greverus emphasized the fact that though her lecture was titled as the fieldwork from the perspective of gender, her foci were more on the interpersonal relationships and dialogues between fieldworkers and people living in the country of field research, and she claimed them to be scientific methods. She further mentioned her own experience in Sicily where she successfully developed her fieldwork skills.

枠づけの枠、あるいはエスノグラフィーの集合写真ステッカー　Faming Frames oder: ein ethnographischer Wandbehang



グレヴェルス写真アーカイヴ

事前のアブストラクトにおいて、「私とフィールド」というタイトルのステッカーを用意することを約束していました。それがこれです。それと共に、私たちの研究所のバースデーにちなむセレモニーでもある本日のプレゼンテーションを、エスノグラフィーの〈ライティング・カルチャー〉（writing culture — Clifford/Marcus 1986; Berg/Fuchs 1993）[i] が直面しているプレゼンテーション危機に突き合わせてみようとも思うのです。

実はこう言ったことによって、すでに私はプレゼンテーション危機のまっただ中に立っていることになるでしょう。写真はここに〈掛っています〉、と言うことは、〈ふるまいのモード〉や〈経験へのアプローチ〉（Schlechner 1987/88）あるいは〈経験のサーキュレーションへの転移〉（Turner/Burner 1986, p. 12）といったパフォーマンス性に富んだ看板がそこに付着しているということです。そして私はここで解釈をほどこすことによって、これらに写真をめぐって（あるいは写真を超えたところで）また新たなパフォーマンスの挙に出ようとしていることになりかねません。

パフォーマンスで欠かせないのは役者ですが、そのほかに出しものも必要でしょう。平たく言えば興行になる演目です。ちなみに『パフォーマンスの人類学』では〈フレーミング〉（Faming）という術語が使われています。それについてヴィクター・ターナー[ii] は、ジョフリー・ベイトサンとアーヴィング・ゴフマン[iii] に依拠しつつこう述べています（Turner 1987/88, p. 140）。

> フレーミングとは、コミュニティ生活の流れてやまない通常の経過のなかから、ある社会文化的なアクションを括りだすことである。それは、ある集団を〈フレームする〉とは、とりもなおさず、その集団そのものの一片を切り取って観察することにおいて（それは回顧のこともある）、しばしば反省的である。

言い換えれば、経過を追跡するものとしての人類学も（あるいは人類学だからこそ）、二つ以上のパフォーマンスに合うような〈フレームをつけ〉、またフレーミングを理解しつつ進まなければならないと言うことです。本質をずばり語るか、さもなければ本質を含むものを際立たせつつ提示するか、でしょう。その際のリスクは、流れゆくものであるが文化が文化的なダム施設（たとえば博物館）に注ぎ込んで止まってしまうことにあるでしょう。それゆえ、ここで掲げた写真ポスターを博物館的な資料としてではなく、舞台装置として見ていただきたいのです。そのさい私たちが心がけるべきは、〈フレームをフレーミングムする〉という創造的な手法を存分に活用することでしょう。

あなた方のフレーミングに、（特にターナーに注目しつつ）可能な解釈の方向を二三に限ってあげてみましょう。ターナーはこう言っています（Turner 1987/88, p. 74）。

> 〈社会ドラマ〉 —— 私（=グレヴェルス）の見るところではドラマでないものなどあり得ないのです！　—— の参加者たちは、何ごとかを行なうだけでなく、自分たちが為しつつあること、あるいは為し終えたものを、他者に提示しようとします。すなわちアクションは〈観衆に向けたパフォーマンス〉の位相を帯びる。

ところで、壁にかけた写真ステッカーにコメントをつけてみましょう。なぜコメントをほどこすのか、それは〈アト・ホームなアンソロポロジー〉の経験において自分自身をめぐって、また自分がかかわる他者を前にして、自分のなかで不安と不安定な感情が広がっているからです。

① フレームの一つは、私たちの研究組織の設立の周年セレモニーであるということ
② その点で特定の誕生日（発足記念日）と特定の人々に枠がはめられるということ（ここでは一人の女性、それは研究所の秘書というどころではなかった女性がそれにあたるでしょう）
③ 枠づけにはまたコミュニティも関わっていること（ここでは研究所のメンバー）
④ 個体で成り立っている社会ではどんな〈コミュニティ〉も創造性をもつ幾人かの個体、すなわち特定の他者のために遊境的（リミノイド）なイヴェント[iv]を案出する個体をもたなければならないということ（ここでは女性から女性へという形をとります）。
⑤ そのためには助演者が必要になること（ここでは男女を問わず、名宛人にあたる研究所の職員あるいは元職員がそれに該当するでしょう）。
⑥ そして舞台（ここでは研究所がそれにあたるでしょう）。
⑦ 枠づけのためには、さらに共通性にかかわるテーマが欠かせないこと（ここではエスノロジーのフィールドがそれになります）。

⑧　それと並んで枠そのもの（ここでは、記念出版ならざる記念写真）。

⑨　さらに枠には暇つぶしとも見えるような工夫（ここでは写真を縫い合わせていること）も加わること（これまた、一人の女性がそれを担当しました）。

⑩　テーマの「私とフィールド」は研究所の活動から本質的な一部分に焦点を当てる意味をもつこと、またその一部分を研究所自体の（共通の）反省的検討と回顧に供する意味をもつこと。

⑪　壁に懸けたステッカーは、包括的な枠組「文化人類学＆ヨーロッパ・エスノロジー研究所」で、それはまた自己呈示に向けた個体の枠組み（自分をどう見るか、他人にどう見られたいか、それに合わせて自分で写真を選び、またそれによって自分で自分に箔をつけたりしたわけですから）にもなっていること。さらに自己呈示の裏には他者提示（つまり写真を撮った人がいるのですから）が隠れているわけですから、これによって解釈の解釈が解釈（その最後の歯車が本日の講師の私ということになります）の前に明らかにされるということ。

これ以上の個人的な枠づけの中身ついては、読者の皆さんの解釈にお任せしましょう。ただ、ここでおそらくすぐには見えてこないものへのヒントにだけはふれてみましょう。20点の写真のなかで、8点が女性、7点が男性、3点がこの研究所の男女一緒のワーキング・グループ、そして2点ではやはり研究所のメンバーの男女がペアでフィールドワークにたずさわっています。また2枚の写真はフィールドワークのプロジェクト・チームで、女性か男性かはともかく、チームリーダーがいます（どちらも正面に映っています）。ちなみにちょうど真ん中に位置するペアの写真は、私たちの学生の二人が本ものの〈インド式の結婚式〉を挙げている様子です。その下の写真は、ポーズをとった女性の文化人類学者、またその下はちょっと年配の学生です。また、いわゆる典型的なフィールドワークの光景、つまり他者を前にしているような現れ方をしているのは女性たちだけです。男性と女性をめぐる解釈となると常に身体言語が話題にされますが、つまるところこれらにもそういう面があります。私の見るところ、少なくとも8枚では、研究所のメンバーは所有慾を帯びて攻撃的な、あるいは力を誇示する構えを見せていますが、そのなかで女性が写っているは一枚だけです。男あるいは女はどういうふうに現れることを望んでいるのでしょうか。〈公衆を前にしたパフォーマンスのあり方とは？〉ということになるでしょう。私たちは、これからさらにフレーミングをほどこす過程で、多くのシチュエーションや姿勢のあり方に何度も出会うことになるでしょう。

私自身の写真は、1986年に南太平洋に三か月滞在したとき、フィジー諸島のある小さな島で撮ってもらったものです。私にとってそこは、大叔父にあたる人の足跡をたどる意味もあったのです。島の〈リース・ファーム〉にはペンションが設けられていて、混血を

ふくむ三世代家族が大勢で経営していました。そして毎夜カヴァ・ドリンク[v]と音楽の催し物が開かれました。カヴァ・ドリンクを作るのはもっぱら若い男性たちで、最初の盃は彼らのチーフが手にします。音楽と歌は男の領分で、女は台所仕事がすんだあとでも背後に坐っています。そこでよく踊られる歩行ダンスはペアの踊りで、またそれに続いて〈リトル・ディスコ〉にもなることもあるのですが、特に16歳のフィリピン人の少年がやりたがったものです。写真は私の長男が工夫して撮ってくれました。花飾りは女性たちが私の髪に挿してくれましたが、それは大笑いをさそったものです。私の髪はちぢれていますので、花かんざしを留めるには向いていなかったのです。私や他の人々への地元の女性たちの誤解の場面というふうにフィールドワーカーは好んで記述しがちですが、そうではなかったのです。私たちは、地元の男性にとっても女性にとっても、要するに客人、つまり異邦人だったのです。しかしまた〈性別をもたない〉ロール・プレイヤーになることを心配する必要もなかったのです（これについては、後の説明を見てください）。

この写真を私がえらんだのは、なぜでしょうか。私や、私と同じく花かんざしを着けてもらった者の遠方への憧れもあるでしょうけれど、そればかりでもないのです。たしかにサイエンティフィック・コミュニティから遠く離れた島々での滞在は、私にはたいそう幸せなひと時でした。その経験を、私は、1987年に「文化のジレンマ、近い異邦人と遠い身内」というテーマで発表しましたが、それはフィジーを〈近しく経験した遠い存在〉としてまとめたものでした（Greverus 1988; Greverus 1995, S.251–287）。ステッカーに仕立てたエキゾチックな写真が示すように、それは私には〈文化人類学の旅〉を経験する試みでしたが、当時は罰せられかねないほど挑発と見られたものです。それどころか今日でもそういう面はあるでしょう。つまり、たとえばシベリアへ行くのならいざ知らず、〈南の島〉を訪れるのでは研究旅行とは言えないということだったのですが、咎(とが)めたのは経費を負担した役所や審査にあたった裁判所だけではなかったのです。隣接学である当時の民族学者にも私を〈野蛮人〉と論評した人がおり、さらに民俗学の大会でも、私の発表に対して〈率直に言えば、今の発表者の採録能力は熟したものなどではなかった〉との意見が述べられたのです（Bockhorn 1988, I.S.87）。

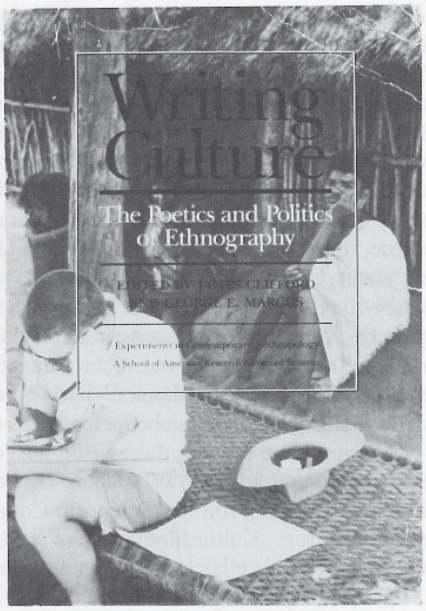
〈エスノグラーフには、ショックをあたえることはゆるされるだろうか〉、とジェームズ・クリフォード[vi]は問いかけています（James Clifford 1981, p. 551）。いつ、どこで、何の目的で？

パフォーミング・カルチャーに関する私の最初のフレーミングは、（壁にかけたステッカーを例にとるなら）、自己省察がそれにあたるでしょう。私たちの研究所のメンバーは、（男であれ女であれ）フィールドワーカーとしての自分をどのように思い描いているのでしょうか、どんな相互作用的な営為形態がどんな他者とのあいだで出現するのでしょうか。そして周辺的なことがらでは（とは言ってもすこぶる目立つものでもありますが）そ

れは男の姿勢と女の姿勢とどんな関係にあるのでしょうか。

私の二つ目のフレーミングは、フィールドにおける他の研究者たちについてですが、そのさい私は、自己と他者の解釈を男女のパースペクティヴに敢えて〈限定〉しようと思います。この焦点の当て方は、このところ開かれた研究大会のフレームを〈課題〉として取り入れたのです。その一つはトゥッツイングで企画された研究発表大会のテーマ「家から出ろ、方法としての女性のフィールドワーク」(Tutzing 1996) です。二つ目は今回このマールブルクでの「男、女 —— 文化における性カテゴリーの意味とは」(Marburg 1997) です。最初のテーマが、どちらかと言えば自己をめぐる文化的・パフォーマンス的な領域にあって自己完結し、大学とは遠いところで措定されているのに対して、二つ目は（歴史に残る）他者の記述・分析の分野に目を向けるもので、大学らしくもあれば、性差に重点をおいてもいます。その点ではむしろ男性的な原理ということになるでしょうか。ともあれ、これらの問いに沿って、写真資料の身元の割り出し作業を試みようと思うですが、一般論としてではなく具体的な事例についてテキスト解釈にまで進めば、それ自体がまたもや挑発になるのでしょうね。

聞き取りをするアンネ・パットナム（Hunter/Witten 1976, p. 168）
〈結婚したいのなら、文化人類学者としなさいよ。彼女は、君が話すのを中断しないように自分を訓練していた。君がもっと話しつづけるようにね。(フィンランドの人類学者の忠告）(Barley 1993, p. 7)



記述する文化人類学者（Clifford / Marcus 1986, 表紙）
〈ポストモダンの人類学は話をする人間を研究する。ディスクールは、対象とその規準である。ディスクールも同じく理論的対象であり実践である。そして手段と目的とのあいだのこの反省的関係はディスクールを可能ならしめ、またディスクールによって可能にされる。ポストモダン人類学は（言葉と世界が相互交代的にないまぜになった）視覚的メタファーを補う。だからと言って、世界と言葉のどちらにも起源的にも存在的にも優位を認めるわけではない。ここにおいてバークレーの〈そこに居るのは参加すること〉(esse est percipi) は〈そこにいること、それは語り合えること〉(to be is to be spoken with) になる。(Tyler 1991, S.163)

観察者が観察される —— 解釈者が解釈される

1970年代の帝国主義批判

「写真に見るエスノロジーの歴史」(Berliner Hefte 12/1979, S.44f.)
左上：写真 1，左下：写真 2，右上：写真 3，右下：写真 4

問い：

—— 女と男、あるいは聞き入るか vs 企画するか、創造的原理としてのそれぞれの内的姿勢とは？　言いかえれば研究者による他者設定とは？

—— フィールドワーク、とりわけ聞き取りとしてのフィールドワーク。〈表出の危機〉あるいは〈エスノグラフィーの認識過程をめぐるエスノグラフィー〉(Berg/Fuchs 1993, p. 15) を男性が思いめぐらすといういわばオフサイドが起きるなか、相手に耳を傾けるという王道は女性の領分となっているのではないでしょうか。

—— フィールドからの撤退の正統性とは？

フィールドワークへの批判にはデスクワークの永い伝統がひかえています。その中心人物は、日記が死後出版を見た後のブロニスワフ・マリノフスキー[vii] でした。それについ

て、特に性差に重点をおいたフレーミングと性差に重点を置いたパフォーマンスに目を向け、耳を傾けようと思います。ちなみに、1979年当時の解釈はこうでした。

〈フィールドで作業中〉のエスノグラーフを写した4枚の写真がある。それらは、〈対象〉への研究者のそれぞれ異なった姿勢をあらわすドキュメントとなっている。エスノグラーフで宣教師のパウル・シェベスタ[viii]（写真１）は1929年から1930年にかけてコンゴのイトゥリ・ピグミー族[ix]のあいだで暮らし…地元の人々から〈ピグミーの父〉と呼ばれた、と彼自身が述べている。ブロニスワフ・マリノフスキー（写真２）はイギリスの社会人類学の定礎者で、第一次世界大戦の最中、かならずしも自由意思だけではないままメラネシアのトロブリアンド島に滞在した。…彼のフィールドワークは永いあいだ模範的なものとされてきた。数年前に彼のフィールド・ノートが公刊されるまではそうでであった。このエスノグラーフの白のトロピカル・ファッションと硬い姿勢は、〈参与観察者〉が学術的な距離をとっていたシグナルである。そのシグナルは、エスノグラーフは異質な社会に完全に溶けこまなければならないというマリノフスキーの主張とは奇妙なコントラストをつくっている。

マーガレット・ミード[x]（写真３）がアメリカの大学での勉学を終えた直後、サマア諸島においてエスノグラーフとして最初の現地調査をおこなったのは、24歳になったばかりの頃だった。そのため、彼女に対しては、著作『サモアの思春期』(1928)に描かれた男女のインフォーマントたちはアメリカの女子学生流にアレンジされているとの非難が投げかけられたものである。それはともあれ、彼女が撮らせた写真には、今日に至るまでアメリカの文化相対主義をライト・モチーフ的に規定する諸文化親交の理念がはっきり表れている。

最後の（写真４）は、現代のエスノグラーフで、シェベスタと同じくイトゥリ・ピグミー族のあいだでしばらく暮らしたアンネ・パットナム[xi]である。ここにはパースペクティヴの逆転、すなわち立場の交替がみとめられる。〈地元民〉は賢明な教師に、エスノグラーフは注意深く聞き入る学生に変わったのである。(Berliner Hefte 12/1979, S.43)

次いで1984年にフィールドワークの報告集を編んだウッツ・イェクレ[xii]は、これらの写真についてこう記しています。

マリノフスキーの調査は、今日ではさまざまな側面を加味しても、やはりコロニアリズムのように思われる。実際それは、トリブアンド島で撮られた写真に歴然と現れている。筆者がここで取りあげるのは2枚である。(なおマリノフスキーが一団の子供

エスノローグの前に立つ晴着をつけた地元の二人の少女（Malinowski 19179, S.2）

エスノローグとカツラをつけた地元の男（Malinowski 19179, S.229）

たちからしゃがんで聞き取りをしている写真を拾わなかったのは、以下の解説から明らかになろう）。とまれ２枚のうち最初の写真では、白人はブリッジ・ズボンにゲートルを巻き、それに付きもののトロピカル帽をかぶって、写真のほぼ中央に立っている。そして二人の少女の晴れ着を手で調べている。女性の付けている首飾りを彼は物めずらしそうに見つめ指で調べ、片や少女は当惑したように視線をそらせている。とてもカメラを正面から見ることができないらしい。そしてなすがままにされている。少女の脚は強くとじられているが、それに対してエスノグラーフの方は膝を気楽にあそばせている。あきらかにエスノグラーフがその場の主人であり、リラックスしてさえいる。隣りに立つもう一人の少女も、その姿勢は卒倒する寸前のようにも見える。背後の木陰に坐っている男たちが何を考えているのかは定かには分かりかねるが、一人はエスノグラーフのしぐさにコメントを加えているのかも知れない。子供たちは、カメラを見つめているように思われる。左端の男は、遠方に目を走らせを、両腕をさすっている。その表情は腹立たしげとも見うけられる。内心に怒りがこみあげ、その爆発をおさえているかのようである。それはシチュエーションを変えてみればよく分かる。例えばだが、日本のエスノグラーフがキモノ姿で筆者のところへ来て、筆者の妻に婚礼衣装を着けることをもとめ、私の目の前で妻のネックレスをいじったりしたとすれば、そいつを追いだすでしょうね。

二枚目の写真では、エスノグラーフは一転してリラックスどころではなくなっている。サファリのハンターさながら丸太の上に立ち、しかも傲然と片脚を前へ突き出している。両手を腰に当てているしぐさは、まるで仮想のコルト拳銃を抜こうしているかのようである…。（Jeggle 1984, S.31f.）

ジェームズ・クリフォードも、1986年に公刊した『ライティング・カルチャー：エスノグラフィーのポエティックとポリティックス』（Clifford/Marcus 1986）のなかで、エスノグラフィーが他者を構成するときのテーゼの見本として、マリノフスキーの発見されたばかりの写真を活用したものです。

> もう一枚、マリノフスキーが慎重に撮らせた写真では、彼は机の前に坐って書きものをしている…この注目すべき映像はほんの数年前に公になったのだが、正に現代の標識である。マリノフスキーの時代ではなく、私たちの時代のあり方である。エスノグラフィーの作業過程の起点に立つのは参与観察や（解釈に都合のよい）文化的テキストではなく、記述、すなわちテキストの産出である。記述はもはや単なるマージナルな、あるいは隠れた営為ではなく、人類学者がフィールドワークの間や後に手がける中心的な営為に押し上げられた。これが最近まで問題にならず真剣に議論されもしなかったのは、リプレゼンテーションからは透明性を、経験からは直性をもとめるかたくななイデオロギーを反映している。（Clifford 1993, p. 104f.）

写真の〈発見者〉、ジョージ・W. ストッキング・ジュニア[xiii]（George W. Stocking, Jr. 1928–2013）は、それを1983年に編んだ『観察される観察者』のカヴァーにもちいました。それは記述活用を説いたスティーヴン・タイラー[xiv]らしい営為でもあるでしょう。しかしマリノスフスキーが前面に押し出したのは、抑圧的な他者設定の全能の身振りあるいは従来陰にかくれていた他者を創造的に舞台設定することでした。

> 彼らを記述し、あるいは彼らを創造するのは私なのだ。この島は私が〈発見した〉のではないが、私によってはじめて見事に経験され、知的に把握されたのである。（Malinowski 1917/1918, in: Stocking 1983, p. 101）

それは〈オーナーシップの感覚〉（同上）であると考えられています。あるいは、〈ネイティヴの物の見方やそのライフをめぐる関係、その世界観念を把握する〉（Malinowski 1922, p. 25）ことが専門分野を前にした責任であると考えられています。ストッキングは歴史家として、日記にもかかわらず、あるいはもっと適切に言えば資料としてのフィールド・ノートをほとんど網羅的な見わたすことを基礎にして、また実際、フィールド・ノートに依拠しています。しかし彼もまた、一面的な（すなわち男性的な）創造過程をもって〈エスノグラーフのマジック〉であると考えています。

その〈エスノグラーフのマジック〉に女性が参加していないとすれば、女性は排除されているのでしょうか。正にその点から、フェミニストでもある女性たちが活発な〈ライ

ティング・カルチャー・ディベイト〉を始めてもよいところでしょう。ちなみに1986年に出版された『ライティング・カルチャー』（Clifford/Marcus 1986）では女性の寄稿者は一人だけで、またフェミニズムの立場の女性は皆無でした。その選択について、クリフォードは序文のなかで理由をこう説明しています。

> フェミニズムのエスノグラフィーの場合…、コントロールを排除した記述形態ではなくなり、またエスノグラフィーのテキストをそれ自体として反省的にとらえることでもなくなってしまった。（Clifford 1993, p. 127）

それに続いて現れたフェミニズムの側からの反論や論議（参照，Behar/Gordon 1995; Rippl 1993）にもかかわらず、ライティング・カルチャー・ディベイトから刺激を受けてエスノグラフィーの表出方法の危機をテーマにドイツ語で出されたヴァージョン（Berg/Fuchs 1993）には、女性の声はまったく欠けたままだったのです。

ポストモダンの人類学とフェミニズムの人類学のあいだの学問的なディスクールは殊のほか対決的な様相になっていますが、同時に一点では重なってもいます。〈言い得ぬもの〉をモノローグ的に記述すること（参照，Tyler, *Das Unaussprechliche. Ethnographie, Diskurs und Rhetorik in der postmodernen Welt*. 1991 [1987]）、それに人類学のなかで〈書き記しようのないもの〉（参照，Ripple u.a., *Unbeschreiblich weiblich. Texte zur feministischen Anthropologie*. 1993）。自分自身と重なる他者、そしてよそ者の他者、その両者が修辞学的な人物像になってゆきます。対話のフィールドは書きもの机の上での対話という地平の彼方に沈んでゆくのです。

人類学のふるさと帰りである〈すばらしい新世界〉を後にしてデスクで書きものをする人類学者の〈洗練されたコミュニティ〉、この行程から私は離れて、（実はテキスト作りをめぐるディベイトがそれを私に教えてくれたのですが）フィールドに集中的にあらわれた男女それぞれの不安や憧れや支配欲といったアイロニックな試みを、むしろ高まりつつある〈両性具有的〉能力と突き合わせてみようと思うのです。

もっともこの点でも（解釈者の観点をつかもうとすれば）先ず屹立するのは、やはり輝かしい文化人類学者マリノフスキーの写真です。それは80年後の〈私ならそいつを追いだすだろう〉（Jeggle 1984, S.32）という代物ではあるのですが。

とまれ、男性のフィールドワーカーが写った次の写真は、〈男と女の身体言語〉は家父長的な力関係の名残りというマリアンネ・ヴェックスのテーゼ（Wex 1980）を裏付けているかもしれません。それは、しかしその写真は〈写真をめぐって誰が誰を解釈するのか〉よりも厳密に読み取られるのかも知れないとの解釈を欲している人々向きでしょう。

トーマス・タイエ『我々と野蛮人：食人風習を覗く』（1985, S.54）には、この写真のキャプションとして「氏名不詳の人類学者とインディアン女性たち、おそらくブラジル、1930年頃」とある。この写真はそれに先立ってE. ビレッター『ラテンアメリカの映像：1860年から今日まで』（Zurich 1981, S.20）にも収録された。写真自体は、ハック・ホッフェンベック・コレクション（Sammlung Hack Hoffenbeck, New York）に含まれる。
筆者（グレヴェルス）のコメント：確かめようもなく確かめられもしなかったが、タイエのテーゼには打ってつけではあろう。

〈1993年：絵を描く女性たちの村で〉 —— サン・ホアン・コマラーパ／グァテマラ
筆者（グレヴェルス）のコメント：筆者が撮った写真だが、身長を〈家父長的な関係〉となるような表現にはしたくなかった。実際〈絵を描く女性たち〉は高い自意識をもっている。筆者がここで狙ったのは地元民と訪問者が截然と分かれるような構図だった。

男性のフィールドワーカーから女性のフィールドワーカーへ：フィールドワークに女性的な原理があるものでしょうか？ —— 征服の彼方、しかし失神のジェスチャーなどの彼方でもあります。もう一度先の事例を取りだしてみましょう。プライヴァシーに土足で踏みこんでくる人類学者（マリノフスキーその人、あるいはイェクレの解釈で譬えとされた存在不詳の日本人）、そして自分の妻のことになると〈そいつを追いだしてやる〉（Jeggle 1984, S.32）と息巻くエスノローグ。

〈追い出してやる〉とは、言いかえれば、誰かが中にいるということ、つまり女性がいて、〈自分と一緒に行動させ〉、〈寄り添わせ〉、〈失神のジェスチャーをみせる〉女性。そしてこの中にいる女性の〈持ち主〉が、外から乗り込んできた研究と称する詮索者を叩きだす。しかも、遊んでいる方の脚を突き出しまでする。しかしこれって、〈オーナーの感覚〉じゃないでしょうか？

これに対して、同じく〈家から出る〉のでも女性のフィールドワークの視点から見れば、内をまもる〈幸せな牢獄〉を指示する男のプロジェクトへの女性の反抗をシグナル的に示しています。女性によるフィールドワークとは、決して〈女性的〉である必要はなく、それが意味するのは、自立した存在と理解されたよそ者と自立したふれあいができる

出典：Dostal 1985, S.75
筆者（グレヴェルス）のコメント：フィールドワーカー、ウォルター・ドスタルは（参照, S.79の写真）

家畜を飼う人々のキャンプ、インドのトロヴェヴァーディ（Torvevadi in Indien）1991年 ——このとき筆者はインド研究家ゾントハイマー氏とテレビ局の二人に同行してキャンプへ入った。
筆者（グレヴェルス）のコメント：私の写真では研究者（中央に坐る人物）が力を揮うような構図にはしたくなかった。ここで狙ったのは、打ち解けた空気だった。〈服装では〉不釣り合いな研究者が会話をしているという状況だった（実際、この敷物の上で私たちは飲食を共にしたのだった）

実際行動です。すなわち、人間であることを指しています。

これにはさまざまな異論もあることでしょう。きわめて男性的とも言われかねません。私はある調査のために大学病院で男性の同僚たちのもとを訪ねたことがあります。〈当然のことながら〉、質問に来るのが同僚でしかも女性である場合、男性たちは時間の都合をつけてくれます。それは、敗者（病気か何かの障害をかかえている男女）がそれにめげずに正面から相手にされていると感じられるような会話の場がお膳立てされるのと似ています。また〈これで一体何をしているわけですか〉、女性の人類学者にはこういう反問がなされることもあります。つまりエスノロジーないしはアンソロポロジーは、（医師との会話とは正反対の）誰もが一緒にお喋りできると思っている気ままなファンタジーの空想世界となっているのです。そこで、会話はこうなります。エスノグラーフたちについてよく知っている誰かから、インド人のあいだで、白人の男たちから暴行を受けた女性たちのケースを調べている女性人類学者について聞いていたとします。彼女がフィールドワークの地を離れようとしたとき、彼女自身がインド人の男たちから暴行を受けたのです。

この話は、〈家を出る〉女性に対する男性の（それに人種的な）力と復讐のファンタ

ジーですが、これ自体はコメントをつけずにおきましょう。ここでは、家に残された男たちが、（語られたり記されたりした）話を助けにして、〈よそへ行ってしまった〉女を他者区分することよって自己を救い出そうとしたのです。

しかし、〈外では〉研究者である女性が女としてしっかりしているとはどのようなことなのでしょうか。

スザンネ・ザックシュテッター[xv]がフィールドワークの報告「私たちは所詮みんな女なのよ」で提起した論議（Susanne Sackstetter, *Wir sind doch alle Weiber*, 1984）は、昔も今も変わらないものでもあるでしょう。すなわち、家の外で能力を発揮することをのぞむ前に、家を整え、母親として一人前であらねばならないとされるのです（同上，S.164）。それは外からの圧迫だけのことではありません。

私たち女性は、内からも外からも、この圧迫から逃れられない。

ちなみに次に挙げる対比に見えるロールプレイングの調査には私も参加していました。そこからは〈外で〉も、男と女の作業分担がかかわっていることが分かってきます。

〈学術活動における社会的な力〉の研究においてこの〈圧迫〉が特に明瞭になるのは、まだ職業的なポストを得ていない女性研究者が女性研究者として正規のポストに期待をいだき、ある種の先入観をひろげるときでしょう。

女性の大学教授と言えば、硬直した女性のイメージが頭にこびりついてはなれません。逆にしっとりして気がきいていたりすると、彼女の学問性に疑問がわいてきます。私にとっての女性の教授像は、かたくなで即物的、そして情緒や感情移入などの

プロヴァンス 1980年

ジャガイモの収穫：男が掘り返し、女が集める

オランダへのエクスカーション（参照，人間の住み処としての環境1976）
写真の下の方、軸足でない片方を遊ばせているのは母権制の主張に見える？（［訳注］マリノフスキーの写真へのイェクレの解釈に対する批判のようである）

（女性の）定番をはねつけるような人ということになります。女性教授がハイヒールをはいたり、ミクロのことがらを回避できないとすれば、私のなかでは評価は最低になり、我慢できなくなります。（Hasenjürgen 1996, S.267）

女性研究者が〈硬直した〉人間でないとき、そこに現れるのは女性自身がもつ自己像（これ自体がオウン・ボールかもしれませんね？）、すなわち社会に定着した女の諸形態、娘・母親・祖母・孫娘・妹そして妻ということになります（Sackstetter 1984, S.165）。

女性のフィールドワークについて早く1970年に初版が出たペギー・ゴールド[xvi]の『フィールドの女性たち：人類学的経験』（Golde 1970, 1986）のなかには、〈女という異邦人〉のキイワードの下、5編の報告がフィールドワークの難しさを取りあげています。そのうち4編は、男女の両方に共通の課題とみてもよいかもしれません。つまり最初の疑り（initial suspicion）にはじまり、歩み寄り（conformity）を経て、一致と両極性が予想されるところの互恵性（reciprocity）へ至り、さらに男女にかかわらず研究者が直面するものであるカルチャー・ショック（culture shock）まで延びるという組み立てです。そして5つ目のテーマは、ペギー・ゴールドがプロテクション（protection）呼んだもので、保護を意味するこの術語によって傷つきやすさ（vulnerability）と挑発性（provocation）とが結合しています。そしてここでも、性差を〈中性化〉してしまうような役割を受け入れるこ

とが望ましいとされます。つまり、子供 —— 姉や妹 —— おばあちゃん、あるいは保護者たる夫に付き添われる存在、というわけです。そもそも誰がこういうイメージを発信したのでしょうか？　どうして、女性のフィールドワーカーには、家庭にかかわるような課題をのぞけば担当部門がほとんど用意されないのでしょうか？　なにゆえ、女性のフィールドワーカーは〈グループの中心人物〉という位置に決して立てない（Sackstetter 1984, p. 164）のでしょうか？　あるいは、精々、関心をもつ対話のパートナーでしかあり得ないのでしょうか。なお、ここで私が考えているのは、具体的な対話では先ず人間が大事ということです。これについて幾つかの事例をあげましょう。この研究所のフィールドワークの経験から、特に女性にかかわることがらなのですが、もちろん男性にも無縁ではありません。

エスノ心理分析家エリーザベト・ロール[xvii]は、経験交換としての我と汝とエス（Ich-Du-Es）という対話的なフィールドワーク原理について、女性フィールドワーカーにはそのチャンスをほとんどあたえなかったものです（参照, Greverus in Groffmann u.a. 1997, S.65ff）。ロールは、女性が子供の役割や母親の役割を引き受けることを、性差にもとづく迎撃戦術との見解をしめしました。またそれを踏まえて、潜在的な暴行者としての男性フィールドワーカーというステレオタイプを措定し、潜在的な誘惑者としての女性フィールドワーカーというステレオタイプをそれに対置させました。実際、それはロール自身のフィールドワークのシチュエーションを端的に言いあらわしたものでした。

> 若く、能うかぎり魅惑的な女の肢体をもつ子供

かくして、会食にさいして男性のテーブルに女性が同席することについては、ゲストのもてなしと言うより、むしろ女性の介在によって得られるコントロールの可能性が強調されます。

> 私たちの周りに立っている女性たち、こんなふうにして私の行動や男性たちの行動を殊のほかうまくコントロールすることができる。またそれによって、起きるやもしれぬ誘惑のほんのかすかな兆候をもつかまえて芽のうちにつんでしまう。危険は私の女という性そのものから立ちのぼっているものの、その性を現実化させるわけにはゆかない。（Rohr 1995, S.284）

女性研究者ロールへの庇護者の責務もまた〈すこぶる有効な手段〉であると指摘されます。

ロッカメナ／シチリア（Roccamena / Sizilien）1983年　コミュニケーションの場の広場でのカード記入

ジェノヴァ1992年　旧市街のリノベーションについて建築学の教授と会話を交わす女子学生

スイス1980年　テーマは地域コミュニティ ―― ここにあるのは〈暗黙のすり寄り〉、あるいは〈誰が調査する方で、誰が調査される方だろうか？〉

クロアチア1995年，テーマは避難民の体験 ―― ヴコヴァル（Vukovar）から来た農夫との会話（［訳注］ヴコヴァルはクロアチアの東端の中心都市で人口2万人余りであるが、セルビアと境界を接しており、1991年11月18日からセルビア軍を主力とするユーゴ人民軍が襲撃しセルビア人以外を抹殺する民族浄化作戦の場所となった）

バルト海諸島1996/97年，トゥールブーフ / ウーゼドーム島（Thurbuch/Usedom［訳注］同島はポーランドとの国境に位置し、1945年に島の東半分はポーランド領となりドイツ人は追放された） ―― 農業公社（LPG）の経験を聞く（［訳注］LPG は Landwirtschaftliche Produktionsgenossenschaft の略称：東ドイツ時代にはソ連のコルホーズにならって土地・農具・労働力および生活の一部の集団化・共有化の政策がとられた）

女性研究者が誘惑を秘めていること、これは見まがいようがなく、また凄味をも感じさせるが、それを中和する手段、また彼女のセクシュアリティと彼女の（簡単には探りだせない）市民社会のなかのステイタスから〈立ちのぼる〉危険を相対化する手段…（同上，S.285）

女性によるフィールドワークの場合でも重点がおかれる人間関係願望をめぐるロールのテーゼをこんなふうにセックス性を帯びた性（自己の性と見知らぬ男たちの性）と男たちに征服されることへの恐れにまとめたのですが、これによって逆に、この関係性願望に（他者を理解しようとする）フィールドワークのシチュエーションの側面から光をあてるチャンスが見えてきます。実際、このロールのテキストでも、問われているのは、ゆるぎない存在としての女なのですが、ロールは、異土の女性たちが自分たちの潜在的な誘惑性を前にゆるぎなきものではなくなっているとの型をつくっている！ということなのです！

私自身は、関係性の諸形態をセクシュアリティに還元しなくても、対話的なフィールドワークの本質的契機としての関係を構築することができると考えています。一緒の会食、それは相互のコントロールとして解釈する以外にも、お祭りや（招待客にもホストに向けられる）もてなしや会話のひとときでもあるのですから、むしろこれこそフィールドワークにおける対話原理の重要な結節点だと思うのです。男にせよ女にせよ研究者が自分自身について語り、また訪ねた場所そのものを話題にし、ここだけでなく様式化すること、私の場合には、それが文化間交流としてのフィールドワークのオフィシャルナ空間における対話的原理の本質的な構成素なのです。エスノグラーフが利己的に距離をおいた観察者から自己省察的な会話のパートナーに変わるのは、それ以外のどこにおいて可能でしょうか。文化の担い手として（とりわけ自文化の担い手の立場から）気のおけない雰囲気をつくる役割を追求もし、またその役割を引き受け、それによって文化それぞれの担い手を克服するのがエスノグラーフなのですから。

対話的パフォーマンスとしてのフィールドワーク

三つ目のフレーミングへ進もうと思います。他者設定すなわちライティング・カルチャーの姿勢に対して私が主張するのは、〈存在することとは語り合えること〉としてのフィールドワークこそ私たちの専門分野の心臓部でありつづけねばならないということです。私たちの専門分野 —— こう言うだけですでに言葉につまってしまいます。この大会の発表をざっと見渡しても、中心はドキュメントの分析です。それは現今そのものが分析される場合でもそうなっています。男女を問わず民俗研究者が対話を本領とするのは稀なのです。ウッツ・イェクレが1984年に編んだ『フィールドワーク』ですら、それを手に

フィジー諸島コロレヴ／カダヴー島（Korolevu/Kadavu in Fiji）1986年　大叔父をたずねて（参照，Greverus 1995, S.256ff）

シチリア　1960年 〈グレヴェルスの洞窟〉（Grotta Grevera）、漁師の皆さんと羊飼いトンドさんと会話（参照，Greverus 1995, S.89ff）

した途端、表紙につかわれているのがエジプトの物言わぬスフィンクスであるために、エスノグラフィーのフィールドワークのテーマからは（その本の基本はドイツのフィールドワークなのですよ！）よそよそしい気持ちにならざるを得ません。テキストを読み込んで分析する種類のフィールドワークは、（当然にも批判的な観点から）他のエスノグラーフたちを相手にします。自国・他国ともに〈歴史的な〉エスノグラーフを取り上げます。ヴィルヘルム・ハインリヒ・リール[xviii]やブロニスワフ・マリノフスキーです。イェクレが編んだフィールドワーク論集でも、特に数人の女性研究者が自分自身のフィールドワークをテーマに論じています。その一つユッタ・ドルンハイム[xix]の「私には言えない：私にはとても」（Dornheim 1984）は、癌におかされた一人の女性との対話から得られたものですが、対話原理の学問的・人間的必然性、その私たちにとってのあり方にとってライトモチーフの位置にあると言ってもよいかも知れません。

スティーヴン・タイラーの術語を借りるなら、〈言い得ぬもの〉とのプレイ（Tyler 1991）としてのポストモダンの記述スタイル、また〈書き表し得ぬもの〉（女性的なもの）（Rippl 1993）をめぐるフェミニズムの記述スタイル、さらに歴史的な批判をめぐって自分が感じる不安や思惑のために軌道から逸れがちな記述スタイル、これらの三種類のどれをも貫くのは〈そこにいること、それは語ってもらうこと〉（to be is to be spoken with）という命題で、つまりそのフィールドには距離ができてしまっています。それに対して私は、他者と私という調査研究者の相互のアクションとして、〈そこにいること、それは語り合うこと〉（to be is being spoken with）を対置したいのです。後者、あるいは〈パフォーマンス・カルチャー〉は、対話的に推移する動きなのです。現代社会の断片のなかでのプライヴェートで隙間のある〈私と君〉ではなく、職業的な〈私とそれ〉でもなく、自己と他者を内省的にとらえる人間どうしの対話的な〈我と汝とそれ〉として推移するのです。マル

ティーン・ブーバー[xx]の『対話的原理』（Buber 1984）を開きながら、私はこう言いたいのです。

> 経験科学において対話的原理を語るなら、我とそれに強く組み込まれてしまいます。私が言おうとするのは、我とそれを常に我と汝が貫いているのでのでなければならないということです。それは融合という意味ではなく、対話的原理は距離をも含むという意味においてです。自己について何かを、他者について何かを経験しようとすること、そういう距離なのです。自己を開き、同時に我と汝の関係から常に自己内省しつつ自己に立ち返らなければならない、そういうエスノロジーの視点とでも言ってよいでしょう。（Greverus im Groffmann u.a. 1997, S.65f.）

私の三つ目のフレーミングは、フィールドワークにおける自分自身の経験に戻ることです。それによって、パフォーマンス人類学の方法としての〈フレーミング・フレイムズ〉（framing frames）を押し出すのではなく、パフォーミング・カルチャーそのものであるようなパフォーマンスを枠づける試みです。現実の対話的構築の原理としてのパフォーマンス、そこにフィールドワーカーが関わるのです。

私の理解では、パフォーミング・カルチャーとは、フィールドワークの次元で文化間の関係をつくることなのです。ここでいう文化は二つの相面を併せています。一つは創造的でダイナミックな構成部分で、意味の充実した社会生活を形成することへの参画と呼びたいと思います。それと並んで、個体に内在化された文化の意味づけが行なわれ、それを通じて個体が浮かび上がるのです。

フィールド・シチュエーションの文化間接触にあっては、パフォーマンスすなわち社会的プレイにおいて取り上げられるべきなのは関係性のルールであり、また参加のルールでしょう。斬新なプレイを通じて、パートナーは相互のアクションに入ってゆかなければなりません。文化が成り立つのは、パフォーマンス性を帯びた推移としての社会的な相互アクションにおいてなのです。それがフィールドにおける相互アクションのプレイに刻印されるのは一時的なものに限られるかもしれませんが、また参加者の日常に影響し変化をおよぼします。フィールドにおいて自分のアイデンティティが変化したというのはフィールドワーカーからよく聞くことです。

パフォーマンスとは、文化のテキストがつくられる場である相互アクション・コミュニケーション・シチュエーションを舞台設定することです。理解するためには、共にプレイする誰もがこのテキストを共にかたちづくり、共にテキストを読むことができなければなりません。とは言え、それはテキストがさまざまに解釈されることを排除しません。かの〈私たちすべてが舞台をプレイする〉（Goffmann 1959/1973）とも言われるように、舞台と

しての社会的世界というとらえ方は古くからみられ、また私たちの目的にも合っています。

このあたりで私のフィールドへ入って、プレイの決着の付け方への問いに言葉と写真で解答を試みようと思います。私がフィールドワークという名前のこの〈プレイ〉に『他者と私』のタイトルを冠して自著としたとき、それによってあきらかにしたかったのは、アイデンティティがまとまるには、非常に多くの主体的なプレイイング・センターと同じく数多くのバイプレイヤーを要することでした。行為し思考するどの主体も自己像を描いています（それが各人に独自の核でもあります）。しかしまた〈プレイ〉は、自己の経験と予測が反省的にとらえられ、さらに他者の経験と予測も反省的にとらえられとき、正に一つの共通の（したがって主体相互の）中心をもつようになります。

私の三つ目のフレーミングは、私自身のフィールドワークを検証・回顧することです。そこでの問題設定は、〈そこにいるのは共に語り合えること〉であるような対話的原理、と共にパフォーミング・カルチャーとしての対話的原理はどこまで実際にかたちをとるのか、にあります。舞台はシチリア島を選びます。私自身がフィールドワークにおけるパフォーマンスの諸相、言い換えれば社会的プレイとしての諸相について、私自身の経験にもとづいてより多くあきらかできるからです。

シチリアでの会話

私たちの研究所のフィールドワーク・プロジェクトをまとめた写真集のなかで、ハインツ・シリング[xxi]は、〈私〉のシチリアを〈大きな憧れの小さな年代記〉と評してくれました（Schilling 1994）。実際、シチリアへの憧れは1959年に始まり、以来、私のなかでずっと生き続けてきました。私が一番最近、講演をおこなったのもシチリアでした。今も、ちょうどシチリアへのエクスカーションから帰ったばかりなのです。

その最初は、1959年から1961年まで、私が家族と共に一年以上シチリアで暮らしたことにさかのぼります。そのとき、私たちは客であるとともにホストでもありました。つまりホスト役を果たすことによってさまざまな贈り物の受け手にもなったのです。〈私たち〉の羊飼いはチーズをくれましたし、〈私たち〉の漁師は魚を、という具合です。一緒の会食は会話の機会になりました。これについては、1995年の「私のシチリア」のなかに書きました。

> 私の特別のフィールド体験は、本来、私が専攻した民俗学（フォルクスクンデ）とはほとんど関係がなかった。一年間の滞在はプライヴェートな性格が強かった。1950年代末から60年代初めのシチリアでのことで、〈プリミティヴ〉な暮らしをもとめて洞穴に住んだのだ

が、研究者と言うより、ドロップアウトしたようなものだった。その〈フィールド体験〉では、未知の土地や未知の人々との交流も研究的なストラテジーとしてではなく、お互いに知りあうための相互のやりとりを一歩一歩進めることが主体としての私にも必要だったのだ。

それから20年後、私はシチリアでの会話仲間を事例にしてアイデンティティの問題を考察することになったのですが（Greverus 1978, S.227ff)、そこでは異質な文化のなかでの高密度の体験から得た印象が意味をもちました。それは日ごろの思考と行動の自明性に問題をつきつけるものでもあったのです。次いで私が助手時代に手がけたのは、異文化のなかでの、当然ながら当時は研究費もつかずにおこなった自分のささやかなフィールドワークを、逆にドイツへやってきたイタリアからの出稼ぎ労働者の状況へと反転させて、それを自分の学生たちと一緒に取り組むことでした（参照, Greverus 1965, 1966, 1971)。

私のシチリア —— それは接近、それも50年代末、日常の付き合いにおいて〈近くて遠い人々〉となった存在への接近でした。さらに1960年代や70年代になると、ドイツにいるイタリア人たち自身もそうした付き合いを意識するようになっており、それだけにホームシックに見舞われてもいました。私自身はシチリアの人間ではありませんが、それはシチリアの人々がドイツに属さないのと同じです。しかしまたシチリアのその場所は、私にとっては、自分の一部と言ってもよいまでになっていたのです。ちなみにその〈洞穴〉は、私には、牢獄や罠のメタファーではなく、他者との出会いと会話のメタファー、他者経験のメタファーなのです（Greverus 1995, S.93)。

その後、シチリアは記憶のなかの存在になってしまいましたが、やがて1981年の転機を迎えました。私がシチリアへ復帰したのは、クリスティアン・ジョルダーノとエーリカ・ハインドルの二人と共に、学生を引率してフィールドワークのプロジェクトを準備するようになったときです。フィールドワークを実施したのは1982年から1983年にかけてで、『シチリア —— 人間・風土・国家』（Giordano/Greverus 1986）というドキュメントがその成果でした。

このプロジェクトはシチリア・ファンとの出会いから生まれたのでした。ちなみに、ファンとはエキスパート以上を意味します。クリスティアン・ジョルダーノは私たちの研究所の助手になったのでしたが、何年にもわたってシチリアを経験していました。そしていつしか私たちの研究所の看板になっていたシチリア研究にはある種の懐疑をいだいていました。

シチリアだけの諺ではないものの、〈四つの目は二つの目よりよく見える〉との格言を引き合いに出してグループによるフィールドワークのよさを説くとき、私たちが立

> ち返るのは、研究所の〈調査しつつ学ぶ〉プロジェクトに10年以上もかかわったを経験だった（参照, Greverus 1982, 1984）。このプロジェクトのフィールド作業は、〈フィールドへの憧れ〉に焦点を当てるとともに〈フィールドへの不安〉をも組み込んでいた。しかし異文化のなかへの神秘な潜入という英雄的な孤独のオーラとはあまり縁が無かった。それはもはや将来の学者のためのイニシエーションの儀式ではなかった。逆にグループとして〈調査しつつ学ぶ〉もので、理想としては、それぞれの参加者がその経験を他の者にも供し、それによって先に挙げた格言が実現すればと願われたのである。そうした共同作業は、すでに経験を積んだ者にもさらに多くの活動とディスカッションと仲立ちを得ることを意味している。ところが私たちの大学エスノロジーには、（大学の官僚的な運営態勢という組織面のバリヤーと並んで）プロジェクトによる研究のあり方がでも一向に浸透できないことが明らかになってきた。（Giordano/Greverus 1986, S.9f.）

私がシチリアへ戻ってきたのは、さらに15年経った1996年のことでした。これは〈再訪スタディ〉で、私たちが1981年に訪れた町は先に1968年に地震に見舞われていたため、移転先としてベリーチェ谷に建設されたニュー・ジベッリーナ市へ入ったのです。つまりジベッリーナ・ヌオヴァですが、それはポストモダンのコンセプトによる総合的な事業でした。破壊された元のジベッリーナ・ヴェッキャ[xxii]にはセメントが流しこまれました。アルベルト・ブッリの〈おそらく最もあざやかな作品〉として白いコンクリートがヴェールのようにかけられ、地震で壊れた町の残骸が、その記憶を永遠にとどめるように、と言うのでした（Cattedra 1993, p. 22）。

ジュゼッペ・バルベラはかつて社会改良家ダニーロ・ドルツィ[xxiii]の協力者で、今は「メリディオーネ経済・社会復興センター」の所長さんですが、1980年代には私たちの会話のパートナーでした。そして1996/97年には著作『天空のオフィス』（I ministri del cielo, 1980）のなかで再び公開の質問調査を発表し、事実それはジベッリーナの「ベリーチェ谷研究センター」（Centro Studi Valle Belice）によって地震被災住民のあいだで実施されました。特に高齢の被災者たちは元の場所での建設を希望していましたが（参照, Greverus 1986, S.485）、そうしたもとの土地にとどまりたいという齢者たちの願望ではなく、新しい町で新しい時をはじめたいという若者たちの希望の方が満たされました。しかし現実は願望通りだったのでしょうか。その後の報告は矛盾だらけです。今なおそうなのです。しかもバルベラのアンケート調査によると、住民の意思が直接たしかめられたことは一度もなかったのです。

しかしニュー・ジベッリーナで語られているのは別の言葉です。インターナショナルなアヴァンギャルド藝術とでも言うべき新しい町に響くのは、彫刻群や劇場公演や博物館の

企画や『迷宮（ラビリンティ）』というタイトルを掲げた贅沢なイラスト紙などを通じた声の方なのです。もっとも新聞の「地域の文化」というサブタイトルをめぐって意見はまちまちではあるようです。とまれ、ニュー・ジベッリーナの位置は元あった場所から25kmはなれています。そこが地震に強い地盤だから、というのが理由の一つです。しかし別の理由として、ベリーチェ谷一帯の最大のマフィア団体が土地の売却で大儲けができたことを挙げる人たちもいます。いずれにせよジベッリーナを藝術作品にした最も強力な推進者は、当時のジベッリーナ市長で今は参議院議員としてローマに居を構えているルドヴィコ・コッラオ氏[xxiv]でした。実際、町を藝術作品にしたのは彼でした。しかし私たちが1996年に訪れることになった瓦礫の山（1997年もそのまま放置されていた）自体は、新しいジベッリーナ市長の事業だったのでしょうか？　たしかに、藝術都市（これも住む人の意思がたしかめられたわけではなかったのですが）の住民の壮大な構想をたたきつぶしたのは新市長でした。あるいは廃墟は〈地震〉という投機の申し子です。地震を念頭においたシンボルと思われますが、新しい教会堂が建設されるかも知れません。そのさいニュー・ジベッリーナの目印になるコンクリートの巨大な白い球体を村から運び出す予定であるとのことです。そのかたまりは、今はまだ古い教会堂の倒壊した屋根のそばに転がっています。五千人の住民は、広い雑然とした敷地に新しい町をつくっています。そこには人工的な施設がいくつもあります。南イタリアで住民たちのコミュニーションの中心になる広場（ピアッツア）はもう一つのメルクマールのはずですが、空っぽなのです！　一体何が起きたのでしょう？　と思うと、いつのまにか若者向けのスケート場2リングが姿を見せています。元の町の主役であった年配の人たちが酒場の片隅にすわっているのを見かけることはあります。しかしそれらを除けば、1996年に二度そこを訪れたとき、ほとんど人気（ひとけ）は感じられなかったのです。1997年も、広場（ピアッツア）には誰も見当たりませんでした。例外は土曜日の午後で、〈固まってぶらついている〉十代の若者たちで埋まっていました。人々の願いをあつめた〈文化の革命〉は緒に就いたのでしょうか。土曜の午後がともかくそれにあたるのでしょうか？
しかし住民数五千人の町の広い大通りを駆け抜けるのは車ばかりです。モダンな、ポストモダンな人工の街を走り抜けて車は一体どこへ向かおうとしているのでしょう？

オールド・ジベッリーナはどうなったのでしょうか。これについて語ろうとすると、いつも私は何かつかえてしまいます。建てこんだ家々に当時7千人の人々が暮らしていた古い小さな町は、倒壊の後セメントで固められました。追憶の場所？　藝術作品？　私たち以外にそこへ行く人は誰もいません。昔の小路をたどると、そこにもコンクリートが流しこまれています。2メートル近い高さのあった壁もセメントの大きな屋根で覆われ、小高い膨らみになっているところもあり、隙間に根をおろした灌木が光をもとめて格闘しています。アルベルト・ブッリ[xxv]のこれらの藝術作品は公式の名前は「亀裂（ピアッツアイル・クレット）」ですが、クレーパとも呼ばれています。ひび割れるという意味ですが、死ぬことをも指す言葉

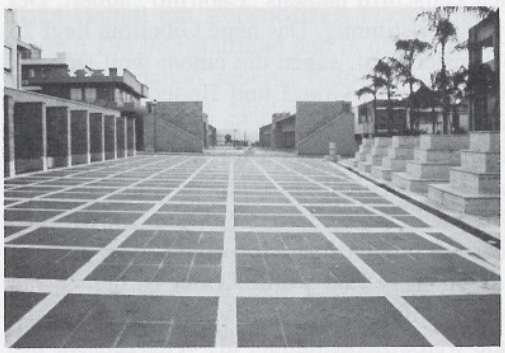
です。人々のあいだでは白い死に装束という言い方もされ、外部からやって来る人たちは死の迷宮とも評しています。ジベッリーナ劇場（Orestiadi di Gibellina）の名称のなかでイル・クレットは演劇的なパフォーマンスの場所で、中心にあるのは崩壊と再生の観念です。もっとも政治政党にとっては、その場を占めるのは老いた〈再建の市長〉であり、3年前に選挙で選ばれた彼の後継者であるのでしょう。対話が耳に入ってくることは一切なく、オールド・ジベッリーナは固められたままです。たしかに新旧二人の市長と私たちとの会話は慎重に準備され、新市長は私たちにも認められたいとの構えをみせました。ちなみに先の市長で今はローマにいる参議院議員は、理念は特定の土地にしばられるものではないと力説したものですが、彼はジベッリーナと袂を分かったのでしょうか。

私たちは地元の他の住民とも話をしました。〈コッラオイシティ〉すなわち再建市長コッラオ氏の賛同者たち、それに懐疑派や反対派の人たちとも対話がはじまったのは、私たちがそこを去らなければならなくなった頃でした。私にとって、対話はさらに続くべきもので、またそうなってゆきました。

硬直した文化的フレーミングをこうして集中して経験したことが、私に文化人類学的な対話をもとめさせたのです。イタリアでもドイツでも。かくして研究所のエクスカーションが始まったのです。

シチリアへのエクスカーションは、一つの訣別でした。私にとっては大学との訣別。限界的な局面へ向かう決別、それは可能性への通路にもなったのですが、そうなり得たのは、一つの理念、調査しながら共に学ぶという理念のおかげです。そこでは、よその他者との対話は内なる他者との対話によって補われるのです。

パフォーミング・カルチャー、〈そこにいるのは共に語り合えること〉、それは〈私のシチリア〉にとって、常に新しい共同作業者とともに取り組む学習の過程であることを意味します。早い時期に一緒に仕事をしてくれた人々も顔を見せて、〈当時〉の対話を伝えて



ジベッリーナ・ヌオヴァ（Gibellina nuova）
1996年

ジベッリーナ・ヴェッキァ（Gibellina vecchia）
1996年

くれ、また新しい共同調査者はそれはそれで独自の経験を持ち寄ってくれました。その当時も今日も、私たち自身も異なった人々も、変化・流動する境界・出会いの経験的契機として大切なのです。パレルモ大学の文化人類学の教授アントニーノ・ブッティッタ[xxvi]は当時も今も私たちのために時間を割いて、ジベッリーナをめぐる私たちの疑問に応じてくれました。彼はジベッリーナの博物館の建設にかかわった人でもあります。また再建の市長コッラオ氏をも知っていて、後者の説く創造的混沌（カオス）や破壊からの新生などの諸理念を共有していました。

> 地震は人も動物を家も根こそぎ死においやった運命だったが、それが私たちに新しいフォルムへの命をあたえたのだった。…ジベッリーナが創造的な結果として生まれたのは、このためだった。
>
> ――（1989年にパリで開催された展覧会「創造のヨーロッパ：ユートピア89」のカタログへのルドヴィコ・コッラオの序文）

ジベッリーナに自分の社会センターを設けて特にベリーチェ谷再活力化プロジェクトにたずさわっているジュゼッペ・バルベラは（参照, Progretto U. E. LEADER II）、パルタナ（Partanna）に住んで、1980年代のプロジェクト「ココ・アッカルド」（Coco Accardo）ではもう一度私たちの会話仲間に加わってくれました。今も参加してくれているのですが、ディーノ（［訳注］フェラーリ系の車種）を駆ってパトラナを案内してくれた頃の懐疑屋さん

ジベッリーナ 1997年 ―― ジュゼッペ・バルベラとの会話

海岸のグレヴェルスの洞穴の前で　1997年 ―― シチリア出身のドイツ人フィリッポがシチリア地元民で私たちのバスの運転手ペペに、私たちとの付き合いやプロジェクトについて尋ねる

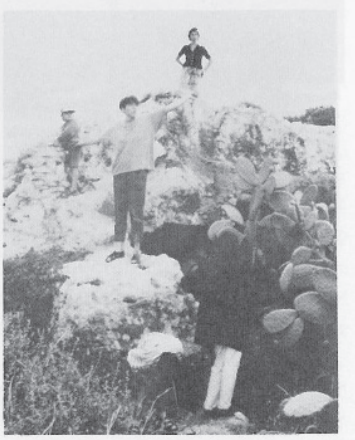
（上）パルタナ（Partana）1997年 〈シチリア人どうし〉 —— ドイツ女性でシチリアに定住したヘルガとシチリアの地元民ココ、二人のエキスパートの会話、私たちは二人に質問をし耳を傾ける

に比べるとややまろやかになっています（Giordano/Greverus 1986）。他にも、ヘルガやジョジョやジョシュカやジュリアンがいました。ドイツ人のヘルガ・ティームは1983年には学生として私たちの調査プロジェクトに参加し（参照，Caballero/Thiem/Weßel 1986）、今は当時私たちが知り合いになったジョジョと二人の子供ジョシュカとジュリアン一緒にセリヌンテで暮らしています。彼女は友人でもありエクスカーションのガイドでもあり、さらに新旧の会話仲間への仲介者でもあり、その上〈シチリア事情〉のエキスパートなのです。私たちのあいだで問いかけることがあるのですが、シチリアについて誰がより高度なインサイダー情報の持ち主であり得るのか、と。シチリアに住むドイツ女性ヘルガか、それとも私たちの学生で両親がドイツで暮らしているフィリッポのどちら。ちなみにフィリッポの家族が暮らすイタリアの家には私たちもしばらく滞在したことがあります。彼にとっても私たちにとっても、シチリアは常に新たな出会いなのです。私たちは、イタリア語とドイツ語にそれぞれ書きなおした資料を評価し合います。写真も点検と送付を繰り返し、新しいプロジェクト理念を議論してきたのです。

対話には完結というものはなく、常に新たな対話がうながされます。自分の著作『他者と私』のなかで私はこう記しました。

> 私たちの学問の道程は他者をもとめて出立することを特徴とする。私たちは異質性をもとめて、そこで異質な自己と近い自己を見出すことが多い。この発見は常に、慣れ親しんだ自己の彼方のもので、凝り固まった文化的な（そうであることによって学問的ともなっている）自明性からの離陸（デコラージュ）をうながし、批判と新航路へとみちびいてく

〈グレヴェルスの洞穴〉の前で　1981年
―― 筆者と新しい羊飼いの男性との会話



〈グレヴェルスの洞穴〉の前で
1997年 ―― エクスカーションのメンバーが、サボテンに覆われた洞穴を探る

れる。(Greverus 1995, S.24)

自己発見へ向けて出立！　この考え方を、私はシチリアでの過去（多様な過去と言うべきでしょう）との取り組みに当てはめてみようと思います。もちろん私自身の過去も含まれています。かつて人が住んでいた場所の廃墟はどうなったでしょうか？　当時の対話はなお理解され得るのでしょうか。新しい対話は古い対話の発展したものなのでしょうか。記憶は、変化過程に重点をおく種類の人類学にとって意味があるのでしょうか。

私たちがはじめ暮らした洞窟を、私はすでに1981年に見つけ出していました。海沿いのもとの場所にそれは残っていたのです。周りはツーリズムに合わせて様変わりしているのに、そこだけ離れ小島のようでした。もっとも洞穴はもはや居住できる状態ではなく、押し寄せる自然にとりこまれてしまっていました。それでも人が住んでいた痕跡はまだ残っていましたし、入口には私たちが植えたサボテンが樹木のようにそそり立っていました。一人の羊飼いの少年に、私たちが知っていた羊飼いトンドさんのことを尋ねました。少年ははじめ訝しげでしたが、私が〈その頃家族とともに洞穴に住んでいたドイツ女性であること〉を話すと、私はふたたびまれびとに戻りました。少年は駆けてゆき、まもなくもう一人の若い地元の女性を連れてきました。質問をしながら、私には、〈洞穴のドイツ人たちの話〉が伝えられていたことが分かりました。こうして、私の新しい経験をもとめる作業がはじまり、古い経験もそこに重なってゆきました（Greverus 1995, S.94)。

1997年には、すべてが変わらずに残っていました。洞穴のなかには誰かが使った形跡がありました。羊飼いの人たちが雨宿りにしていたのでしょうか。それとも放浪者が寝泊

シチリア　1997年 —— エクスカーション・グループが〈グレヴェルスの洞穴〉が見える海辺でお別れの会食をひらく

まりしていたのでしょうか。私たちは一日海辺にいて対話をつづけたものです。これからの計画や記憶をつづることなどでしたが、それはシチリアの一角について共通の枠を得るためです。そしてふたたび集まって会食をもちました！　—— そこにいるのは共に語り合えること。

お気の毒ですが（実はお気の毒ではないのかも知れませんが）三つ目のフレーミングに取り組んでいるうちに本題の〈男—女—人間〉を忘れてしまいました。もちろん私は、もっと多くの話をすることもできるでしょう。私が女っぽく振舞いすぎたことや、私の夫と男性の同僚たちが男っぽ過ぎたことや、シチリアの会話のパートナーたちがすごく人間的という意味で女性らしかったこと、学生たちについてもそれが言えることなど。リチャード・セネット[xxvii]の言い方を借りれば、これを〈親密さの専制〉（Sennett 1983）あるいは公共性の喪失と呼びたいところです。そしてこれは私にとっては、対話能力の喪失、すなわち文化的性や文化的ナショナリティあるいは文化的年齢、あるいは文化的階級を包含し、そして同時にテーマづけることができ、それによって文化的に誘導された親密な〈我と汝〉の専制を相対化する〈相関的な〉肉声（ヴォイス）のなかで（Greverus 1988）他者に向き合うことの喪失、言い換えれば、何よりも自己反省的であるとともに異質なものに対しても反省的な〈それ〉の関係言語に向きあうことの喪失です。私にとっては、それこそが人

間的なフィールドワークになるでしょう。すなわち学ぶ過程、そして所与のアイデンティティや調査者と被調査者という一面的な位置づけから解放するプレイとしてのパフォーマンス。このフィールドワークにおける対話的原理が —— フィールド参加者の誰もが語ることができ・聴くことができ・行為することできという三重の専門能力、言い換えれば話者となり聞き手となり語る対象たることを取りもどすことによって（参照, Lyotard 1986 を踏まえた Greverus 1993） —— パフォーマンスの創造行為について〈厚い知識〉を生み出すことができるのであるなら？　男にせよ女にせよ、一面的な舞台作りという文化的専制を解消させ、文化的な流動性を切り開くことができるのはこの地殻振動ではないでしょうか？　とは言え、メンバーを公的な対話から締め出して、（セネットが描くように）〈反社会的な愛〉へと追いやるような社会では、それは難しいでしょう。そうした反社会的な愛が命をあたえられるのは、（この点ではジグムント・バウマン[xxviii] に耳を傾けたいのですが）そのメンバーが公共性をおきざりにして男か女という所与のナルシズムに溺れるフィットネス社会の固定した諸々の役割（ロレン）においてだけなのです（Bauman 1995a, 1995b）。

セネットは公共的空間を舞台と呼び、また公共性にある人間を俳優たちとなづけています。〈親密な社会〉のなかでは、人間からそうした俳優性は消えてしまいます。

> 人間的自然を一生抱えこみ、経験で増幅し、さらにそれこそ自己自身として探求をつづけて止まないのであれば、それはわざを奪われた俳優の登場であろう。（Sennet 1983, S.353）

> そこで何が失われるであろうか。人間は未知のものとのやりとりのなかではじめて成長するという観念が失われるのである。（同上，S.332）

我と汝の対話という（自文化である）親密さの専制を解消することになる我・汝・それの対話、後者はエスノロジーによるアンチ・カルチャーでしょうけれど、この互いに成長しゆくことが実現するのはそこにおいてでしょう。かかる対話が、教える者と学ぶ者のあいだで普遍的かつ〈相関し合う声〉が響くフィールドにおいて始まり、さらに野外のフィールドにおいて持続し、そして故国の大学へ戻り、さらに再び公共の脱専制の空間へ進んでゆけるなら —— それはまた〈文化のなかの性のカテゴリーの意味〉をも脱することであり、学問の枠をも脱することになるのではないでしょうか。

文献

Giuseppe BARBERA, *I ministri dal cielo. I contadini del Belice raccontano*. Milano 1980.
Nigel BARLEY, *Traurige Insulaner*. Stuttgart 1993.

Zygmunt BAUMAN, *Moderne und Ambivalenz. Das Ende der Eindeutigkeit*. Frankfurt am Main 1995 (a).

Zygmunt BAUMAN, *Philosphie der Fitneß*. In: die tageszeitung (taz), 25/26.März 1995(b), S.19–21.

Ruth BEHAR / Deborah A. GORDON (Hg.), *Women. Writing Culture*. London 1995.

Eberhard BERG / Martin FUCHS (Hg.), *Kultur, soziale Praxis, Text. Die Krise der ethnographischen Repräsentation*. Frankfurt am Main 1993.

BERLINER HEFTE. Zeitschrit für Kultur und Politik 12/1979.

Bewohnte Umwelt. Betrachtungen zum Bauen und Wohnen in den Niederlanden. Frankfurt am Main 1976.

Olaf BOCKHORN, *Kulturkontakt — Kulturkonflikt. Zur Erfahrung des Fremden. 26. Deutscher Volkskundekongreß in Frankfurt vom 28.IX. bis 2.X. 1987. Bericht*. In: Zeitschrift für Volkskunde 84/1988, S.85–89.

Martin BUBER, *Das dialogische Prinzip*. Heidelberg 1984.

Maria CABALLERO / Helga THIEM / Maren WESSEL, *Sizilianische Frauen*. In: Christian GIORDANO / Ina-Maria GREVERUS (Hg.), Sizilien — die Menschen, das Land und der Staat. Frankfurt am Main 1986, S.261–322.

Nicola CATTEDRA, *Gibellina. Utopia e realtà*. Roma 1993.

James CLIFFORD, *Halbe Wahrheiten*. In: Gabriele RIPPL (Hg.), Unbeschreiblich weiblich. Texte zur femministischen Anthropologie. Frankfurt am Main 1993, S.104–135.

James CLIFFORD, *On ethnographic Surrealism*. In: Comparatives Studies in Society and History 23/1981.

James CLIFFORD / George MARCUS E. , *Writing Culture. The Poetics an Politics of Ethnography*. Berkeley / Los Angeles 1986.

Dalarna. Exkursion Mittsommer '74. Frankfurt am Main 1975.

Jutta DORNHEIM, *„Ich kann nicht sagen: Das kann ich nicht". Inkongruente Erfahrungen in heiklen Feldsituationen*. In: U. JEGGLE (Hg.), Feldforschung. Tübingen 1984, S.129–157.

Walter DOSTAL, *Ethnographischer Film — Ethnographische Kartographie: Methodologische Überlegungen zur Datenhebung. Beispiele aus Südarabien*. In: H. FISCHER (Hg.), Feldforschungen. Berlin 1982, S.67–89.

Hans FISCHER (Hg.), *Feldforschungen. Berichte zur Einführung in Probleme und Methoden*. Berlin 1982.

Christia GIORDANO / Ina-Maria GREVERUS (Hg.), *Sizilien — die Menschen, das Land und der Staat*. Frankfurt am Main 1986.

Erving GOFFMANN, *Wir alle spielen Theater. Die Selbstdarstellung im Alltag*. München 1973 (1.Aufl. 1959).

Peggy GOLDE (Hg.), *Women in the Field. Anthropological Experiences*. Berkely / Los Angeles / London 1986 (1.Aufl. 1970).

Ina-Maria GREVERUS, *Anpassungsprobleme ausländischer Arbeiter. Ziele und Möglichkeiten ihrer volkskundlichen Erforschung*. In: Populus Revisus. Beiträge zur Erforschung der Gegenwart. Tübingen 1966, S.123–143.

Ina-Maria GREVERUS, *Die Anderen und Ich. Vom Sich Erkennen, Erkannt- und Anerkanntwerden. Kultur-anthropologische Texte*. Darmstadt 1995.

Ina-Maria GREVERUS, *Die Sehnsucht des Ethnologen nach dem Feld*. In: Heide NIXDORFF / Thomas HAUSCHILD (Hg.), Europäische Ethnologie. Theorie und Methodendiskussion aus ethnologischer und volkskundlicher Sicht. Berlin 1982, S.207–219.

Ina-Maria GREVERUS, *Heimweh und Tradition*. In: Schweizerisches Archiv für Volkskunde, 61/1965, S.1–31.

Ina-Maria GREVERUS, *Kultur und Alltagswelt. Eine Einführung in Fragen der Kulturanthropologie*. München 1978 / Frankfurt am Main 1987.

Ina-Maria GREVERUS, *Kulturbegriffe und ihre Implikationen. Dargestellt am Beispiel Süditalien*. In: Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie, 23/1971, S.283–303.

Ina-Maria GREVERUS, *Die nahe Fremde und die fremde Nähe*. In: Ina-Maria GREVERUS / Konrad KÖSTLIN, Heinz SCHILLING (Hg.), Kulturkontakt — Kulturkonflikt. Zur Erfahrung des Fremden. Fankfurt am Main 1988, S.27–48.

Ina-Maria GREVERUS, *News and Truth or: Folk and Folkloristic. Repression of Truth in News*. In: Narodona umjetnost. Festschrift für Maja Boskovic-Stulli. Zagreb 1993.

Ina-Maria GREVERUS, *Tradition der Traurigkeit und anarchische List. Zu einer sizilianischen Identitätsarbeit*. In: Christian GIORDANO / Ina-Maria GREVERUS (Hg.), Sizilien — die Menschen, das Land und der Staat (Kulturanthropologie Notizien, 24). Frankfurt am Main 1986, S.455–513.

Ina-Maria GREVERUS, *Zur Frage der Effizienz ökologischer Nischen im universitären Bereich. Gefragt aus dem Institut für Kulturanthropologie und Europäische Ethnologie*. In: Kulturanthropologie und Europäische Ethnologie in Frankfurt. Eine Bilanz forschenden Lernens nach 10Jahren. Frankfurt am Main 1984, S.7–23.

Anne Claire GROFFMAN / Beatrice PLICH / Ute RITSCHEL / Regina RÖHMHILD, *Kulturanthropologinnen im Dialog. Ein Gespräch mit Ina-Maria Greverus*. In: A. C. GROFFMAN u.a.(Hg.), Kulturanthropologinnen im Dialog. Ein Buch für und mit Ina-Maria Greverus. Frankfurt am Main 1997, S.15–84.

Brigitte HASENJÜRGEN, *Soziale Macht im Wissenschaftsspiel*. Münster 1986.

David E. HUNTER / Philipp WITTEN (Hg.), *Encyclopedia of Anthropology*. New York u.a. 1976.

Utz JEGGLE, *Feldforschung. Qualitative Methoden in der Kulturanalyse*. Tübingen 1984.

L'EUROPE des createurs. Utopies 89. (Vorwort Corrao).

Jean-Francois LYOTARD, *Das postmoderne Wissen — ein Bericht*. Graz / Wien 1986.

Bronislaw MALINOWSKI, *Argonauts of the Western Pacific*. New York (1961) 1922.

Bronislaw MALINOWSKI, *Das Geschlechtsleben der Wilden in Nordwest-Melanesien*. Frankfurt am Main 1979 (1.Aufl.1929).

Gabriele RIPPL (Hg.), *Unbeschreiblich weiblich. Texte zur feministischen Anthropologie*. Frankfurt am Main 1993.

Elisabeth ROHR, *Die fremde Frau. Der weibliche Blick auf eine fremde Kultur*. In: Gabriele HOFFMANN u.a. (Hg.), Fachfrauen — Frauen im Fach. Frankfurt am Main 1995, S. 265–296.

Susanne SACKSTETTER, *„Wir sind doch alle Weiber". Gespräche unter Frauen und weibliche Lebensbedingungen*. In: Utz JEGGLE, Feldforschung. Qualitative Methoden in der Kulturanalyse. Tübingen 1984, S.159–176.

Richard SCHECHNER, *Victor Turner's Last Adventure*. In: Victor TURNER, The Anthropology of Performance. New York 1987/88.

Heinz SCHILLING, *Fieldwork. Kulturanthropologische Recherchen in Europa. Ein Foto-Album*. Frankfurt am Main 1994.

Richard SENNETT, *Verfall und Ende des öffentlichen Lebens. Die Tyrannei der Intimität*. Frankfurt am Main 1983 (1.Aufl. 1977).

George W. STOCKING Jr. (Hg.), *Observers Observed: Essays on Ethnographic Fieldwork*. The University of Wisconsin Press. Madison 1983.

Thomas THEYE, *Wir und die Wilden. Einblicke in eine kannibalische Beziehung*. Reinbek b. Hamburg. 1985.

Victor W. TURNER / Edward M. BRUNER (Hg.), *The Anthroplogy of Experience*. Urbana / Chicago 1986.

Victor W. TURNER, *The Anthroplogy of Performance*. New York 1987/88.

Stephen A. TYLER, *Das Unaussprechliche. Ethnographie, Diskurs und Rhetorik in der postmodernen Welt*. München 1991.

Marianne WEX, *„Weibliche" und „männliche" Körpersprache als Folge patriarchalischer Machtverhältnisse*. Frankfurt am Main 1980.

訳注

i　**エスノグラフィーの〈ライティング・カルチャー〉**（writing culture）：大きな流れでみると〈言語論的転回〉（linguistic turn）に位置づけられるが、ここで言われるのは特にジェームズ・クリフォードの理論を指し、次の編著によって知られる。James Clifford / George Marcus (ed.), *Writing Culture: the Poetics and Politics of Ethnography*. 1986.（ジェイムズ・クリフォード／ジョージ・マーカス（編集）春日直樹・和邇悦子・足羽與志子・橋本和也・多和田祐司・西川麦子（訳）『文化を書く』紀伊国屋書店 1996）。後出のクリフォードの訳注を参照。

ii　**ヴィクター・ターナー**（Victor Turner 1920–83）：英グラスゴーに生まれ米ヴァージニア州シャーロッツビルに没した文化人類学者。はじめ演劇学を学び、次いでマンチェスター大学で人類学を専攻した。1950年から54年にかけて中央アフリカのンデンブ族の間で特に宗教儀礼と通過儀礼を調査した。ファン・ヘネップの通過儀礼の分離期・過度期・統合期の三段階論を発展させ、特に過度期のあいまい

な様相をリミナール（liminar 臨境的）とコムニタス（communitas 浮き集団）の概念を措定してとらえ、そこに社会劇が組み込まれる必然性を説明した。またその観点から『パフォーマンスの人類学』（*The Anthropology of Performance*. 1986）などによって宗教一般や社会についても論じた。

iii　**アーヴィング・ゴフマン**（Erving Goffmann 1922–82）：カリフォルニア大学バークレー校社会学教授、ペンシルヴァニア大学教授。アメリカ社会学会長。

iv　**遊境的なイヴェント**（liminoide events）：ヴィクター・ターナーが臨境的（liminal）とともに導入した概念で、リミナールが通過儀礼と直接むすびつく社会性・儀礼性をもつのに対して、ラフな形態でレジャーとも接する様態を言う。„-oid“ は似ていること、また擬似的であることを意味する接尾辞。その学術用語が、ここでは拘束性のない自由なイヴェントの意で比喩的に使われている。

v　**カヴァ・ドリンク**（Kava-Getränke / Kava drink）：カヴァは胡椒科の灌木。その根を粉末にして水に溶かして飲むと、アルコールは含まれないが酩酊感があり、フィジー諸島、トンガ、サモア諸島などポリネシアでは向精神剤として儀式的にもちいられる。

vi　**ジェームズ・クリフォード**（James Clifford 1945-L）：アメリカの歴史家、カリフォルニア大学サンタ・クルーズ校教授。エスノロジーの方法を歴史解釈に応用した。特に記述を単なる記録ではなく、記述によって対象ならびに対象と記述者を含む文化圏の関係が特定されるとする記述行為を介した構成的な歴史認識を説いた。

vii　**ブロニスワフ・マリノフスキー**（Bronislaw Malinowski 1884–1942）：ポーランドのクラクフに生まれ、米コネチカット州ニューヘイブンに没した文化人類学者。母国のヤギウェ大学で数学と物理学を学んで学位を得た後、ドイツのライプツィヒ大学でヴィルヘルム・ヴントの民族心理学に接して人類学へ進み、イギリスへ移ってフレイザーの学問をも吸収しつつ1910年からロンドン大学で人類学を学んだ。アボリジニへの関心から友人と共に1914年にオーストラリアへ渡ったが、第一次世界大戦の勃発でオーストリア国籍であったために活動が制限さるなか、なお可能であったニューギニア島東沖のトロブリアンド島で調査活動をおこなった。参与観察の方法を初めて意識的・システィマティックに取り入れた成果は『西太平洋の遠洋航海者』（*Argonauts of Western Pacific*, 1922）として刊行され、文化人類学の金字塔となった。

viii　**パウル・シェベスタ**（Paul Joachim Schebesta 1887–1967）：シレジアの現在はポーランド領の町（Pietrowice Wielkie）に生まれ、ウィーン郊外に没したカトリック教会・神言修道会（Steyler Missionare / Societas Verbi Divini ＝ SVD）の宣教師。早くからエスノロジーを学び、宣教活動は人類学の研究とも重なっていた。マレーシアとフィリピンに赴任した後、特に30年間にわたってアフリカのピグミー族の間で布教にたずさわった。

ix　**イトゥリ・ピグミー族**（Ituri-Pygmäen）：イトゥリ川はコンゴ河の大きな支流アルウィミ川の上流部を指し、現在のコンゴ共和国の北東部、ウガンダやスーダン南部と接する地域を流域とする。そのイトゥリの森に暮らすピグミー族を指し、特定する場合はムブティ族（Mbuti）とも呼ばれる。なおピグミー族はアフリカ中央部の熱帯雨林で主に狩猟で暮らし、おそらく環境への適応として背丈が短くなった先住民の総称としてもちいられる。

x　**マーガレット・ミード**（Margaret Mead 1901–78）：フィラデルフィアに生まれ、ニューヨークに没した文化人類学者。ニューヨークのコロンビア大学でフランツ・ボアズとルース・ベネディクトの指導を受けた。1925–26年にポリネシアのサモア諸島で調査研究を行ない、初期の代表作『サモアの思春期』（*Comming of Age in Samoa*, 1928）を刊行した。邦文では畑中幸子・山本真鳥訳（蒼樹書房 1976）がある。ルース・ベネディクトと共に20世紀のアメリカを代表する文化人類学者とされる。

xi　**アンネ・パットナム**（Anne Eisner Putnam 1911–67）：旧姓アイスナー、夫のパトリック・パットナム（Patrick Putnam）と共にベルギー領コンゴの北東部に 8 年間滞在した。

xii　**ウッツ・イェクレ**（Uz Jeggle 1941–2009）：バーデン=ヴュルテムベルク州ナーゴルト（Nagold）に生まれテュービンゲンに没した民俗学者、テュービンゲン大学教授。ゲルマニスティクと歴史学をボンとウィーンでも学んだが、特にテュービンゲン大学においてヘルマン・バウジンガーに就いて民俗学を学んで生涯テュービンゲン大学で活動した。1966年に博士学位、1977年に『キービンゲン村：あるふるさとの歴史』で教授資格を得た。1981年に員外教授となり、正教授の後、2000年に病気のため早期に定年となった。1984年に編んだフィールドワーク論集は参与観察の枠を突破してフィールドに観

察者の行為を導入する手法によって論議を呼んだ。

xiii　**ジョージ・W. ストッキング・ジュニア**（George W. Stocking, Jr. 1928–2013）：ベルリンに生まれ、米シカゴに没したアメリカの文化人類学者。父親が鉱物資源を専門とした父親の赴任先としてベルリンで生まれ、まもなく父親がアメリカの大学で教鞭をとるようになったため、アメリカで成長した。ハーヴァード大学で勉学後、1959年から1968年までカリフォルニア大学バークレー校の社会史の教授の後、1969年にからシカゴ大学へ移って文化人類学を担当し、1974年に正教授となった。主要著作に『エスノグラーフのマジック』（*The Ethnographer's Magic*, 1992）がある。

xiv　**スティーヴン・A・タイラー**（Stephen A. Tyler ㊐ 1932）：〈ポストモダンの文化人類学〉を標榜する旗手の一人、ライス大学（テキサス州ヒューストン）教授。インドをフィールドとする研究から始め、"*India: an anthropological perspective*". Pacific Palisades, Calif. [Goodyear Pub. Co.] 1973. の後、当初から見せていた書記をめぐる問題性をまとめて『言われることと言われないこと；意思・意味・文化』（*The said and the unsaid: mind, meaning, and culture*. New York [Academic Press] 1978）や『語られぬもの：ポストモダン世界における対話とレトリック』（*The Unspeakable: Discurse, Dialogue and Rhetoric in the Postmodern World*. Madison/Wis. [Univ. Of. Wisconsin Press] 1987）によってライティング・カルチャーを問題をとするリーダーの一人となった。ジェームズ・クリフォード／ジョージ・マーカス（編）『文化を書く』(*Writing Culture. The Poetics and Politics of Ethnography*, ed. by James Clifford and George E. Marcus. 1986,［邦訳］紀伊国屋書店1996）への寄稿者の一人でもある。

xv　**スザンネ・ザックシュテッター**（Susanne Sackstetter）：ドイツの民俗学者、グライルスハイム（バーデン=ヴュルテムベルク州シュヴェービシュ・ハル郡）の市立博物館（Stadtmuseum Grailsheim）の主任。テュービンゲン大学教授ウッツ・イェクレのフィールドワークの改革の試みにも参加した。

xvi　**ペギー・ゴールド**（Peggy Golde ㊐ 1930）：アメリカの文化人類学者。参考文献を参照。

xvii　**エリーザベト・ロール**（Elisabeth Rohr）：マールブルク大学教授、専門は多文化間教育学。マールブルク大学で勉学の後、ロンドンで集団学習方法を習得し、またグァテマラをフィールドとする。

xviii　**ヴィルヘルム・ハインリヒ・リール**（Wilhelm Heinrich Riehl 1823–97）：ビーブリッヒ（Bibrich 現在はヘッセン州ヴィースバーデン市域）に生まれ、ミュンヒェンに没した文筆家。フォルクスクンデ（民俗学）について、グリム兄弟の弟子たちによる神話学の行き方に対して、現実と社会関係を重視すべきことを標榜し、それが20世紀になって再評価された。物事を構造的にとらえ生彩ある表現をあたえ得た文豪であった。民衆の生活実態の構造的把握につながるような実地調査を組み込んだとされるが、今日ではその研究の実際についても、民俗学への寄与についても評価は分かれる。

xix　**ユッタ・ドルンハイム**（Jutta Dornheim）：テュービンゲン大学で経験型文化研究（民俗学）を学び、特に民間療法を現代の状況のなかで追跡した女性研究者。主著『村の日常における病気：癌疾をめぐる社会的位相』（*Kranksein im dörflichen Alltak: soyiokulturelle Aspekte des Umgangs mit Krebs*. Tübingen 1983）が同大学民俗学の研究者組織であるルートヴィヒ・ウーラント研究所の叢書として刊行されている。

xx　**マルティーン・ブーバー**（Martin Buber 1878–1965）：ウィーンに生まれエルサレムに没したユダヤ人の宗教哲学学者。主にウィーンで勉学し、ニーチェやキルケゴールなどの研究を深め、1923年に主著『我と汝』を刊行し、1924年にフランクフルト大学教授となった。ナチス・ドイツの成立後、1935年に国外追放となり、1938年からエルサレムに住んだ。

xxi　**ハインツ・シリング**（Heinz Schilling 1942-L）：ヘッセン州ゼーリゲンシュタット（Seligenstadt）に生まれ、フランクフルト大学でゲルマニスティク、政治学のほか、特にマティルデ・ハインについてフォルクスクンデ（民俗学）を学び、後、同大学教授ヴォルフガング・ブリュックナーの下で博士学位を得た。ザールラント放送局に勤務後、1977年にフランクフルト大学へ戻ってイーナ=マリーア・グレヴェルスに就き、多くのフィールドワークのプロジェクトを協力し、また教授資格論文として「新たな村落性：ライン=マイン川地域の非都市的都市化現象」（*Neue Dörflichkeit. Urbanisierung ohne Urbanität im Rhein-Main-Gebiet*, 1992）をまとめた。フランクフルト大学文化人類学＝ヨーロッパ・エスノロジー研究所の研究成果シリーズ „*Kulturanthropologie Notizen*" の編集・刊行の担当者でもある。

xxii　**ベリーチェ谷**（Valle del Belice）…**ジベッリーナ・ヌオヴァ**（Gibellina nuova）…**ジベッリーナ・ヴェッキャ**（Gibellina vecchia）：ベリーチェ谷はパレルモの南西の山間からシチリア島南海岸にかけて

北東から南西に走る約77kmの谷で、1968年1月に大地震に見舞われた。谷間の中心都市であった人口約7000人のジベッリーナが全壊し、本論で言及されるような移転・再建にいたった。

xxiii　**ダニーロ・ドルツィ**（Danilo Dolci 1924–97）：当時イタリア領であったスロヴェニア側の国境に生まれ、パレルモ県トラッペート（Trappeto）に没した社会活動家、詩人。カトリック教会に属し、神父ドン・ゼノ・サルティーニ（Don Zeno Saltini）が第二次大戦の戦災孤児を保護するためにエミリア・ロマーニャ県モデナ近郊に開いた施設ノマデルフィア（Nomadelfia）で活動したが、同神父が共産主義の嫌疑を受けて教会から締め出されたため、孤児たちを育成する場所をもとめて、〈イタリアで最も貧しい地〉として1952年からパレルモの30km西の漁村トラッペートを活動場所とした。早くから貧困問題に取り組んでいたが、シチリアに移ってからはマフィアとの戦いにも重点をおいた。〈シチリアのガンジー〉とも称されることがあり、国際的にも熱狂的なファンを生むなど影響を及ぼし、またエーリヒ・フロム、バートランド・ラッセル、エルンスト・ブロッホなどの応援を得た。ノーベル平和賞に2度ノミネートされた。

xxiv　**ルドヴィコ・コッラオ**（Ludovico Corrao 1927–2011）：シチリア島トラパーニ県アルカモ（Alcamo）に生まれた政治家。ジベッリーナ市長として大地震に襲われた町の再建に挺身して知られ、参議院議員に転じた。

xxv　**アルベルト・ブッリ**（Alberto Burri 1915–95）：中伊ウムブリア州チッタ・ディ・カステッロ（Citta di Castello）に生まれ南仏ニースに没した20世紀イタリアを代表する前衛芸術家（主に絵画と彫刻）の一人。空間造形にも独自性を発揮し、崩壊したジベッリーナの町を1981年に街路の形状などをなぞってコンクリートで覆ったのはよく知られている。

xxvi　**アントニーノ・ブッティッタ**（Antonino Buttitta 1933-L）：パレルモ県バゲリーア（Bagheria）に生まれた文化人類学者。パレルモ大学教授。主著に『シチリア民衆の形象文化』（*Cultura figurativa popolare in Sicilia*, Palermo, Flaccovio 1961.）、『イデオロギーとフォークロア』（*Ideologie e Folklore*, Palermo, Flaccovio 1971）、『シチリアの復活祭』（*Pasqua in Sicilia*, Palermo, Graphindustria 1978）などがある。

xxvii　**リチャード・セネット**（Richard Sennett 1943-L）…**〈親密さの専制〉**（the Tyranny of the Intimacy）：リチャード・セネットはシカゴ生まれのアメリカの社会学者。ロンドン・オブ・エコノミクス教授およびマサチューセッツ工科大学教授。〈親密さの専制〉は主要著作『公共性の喪失』（原題：The Fall of Public Man. 1977；［邦訳］北山克彦／高階悟：昌文社 1991）のサブタイトル。公共的な価値基準の比重の低下と共に、プライヴェートな親密な関係が思念と行為の基準になり、諸個人は過度の個人性のなかで指標を見失い、閉鎖性のなかで個性の拠りどころが空洞化することを指す。親密（Intimacy）が公共性（Public / Publicity）にとって代わると見ることもでき、また親密さを演出する（政治家やコマーシャリズムの）種々の戦術に人々が抵抗力をもたなくなることも結果する。ポストモダン社会のネガティヴな兆表とされる。

xxviii　**ジグムント・バウマン**（Zygmunt Bauman 1925-L）…**フィットネス社会**（Fitneß-Gesellschaft）：バウマンはポーランドのポスナニに生まれたユダヤ人で社会学者。ナチスの侵攻を逃れてソ連へ移り、戦後ワルシャワ大学教授となった。1968年に反体制派知識人として追放されてイスラエルのテルアヴィヴ大学教授となり、後にイギリスのリーズ大学教授となった。フィットネスはその理論で使われる表現：近代社会において規範の監視・継続システムの代表的なものであった大規模工場と徴兵制にもとづく軍隊が大きな意味をもったが、それが終わったポスト・モダンにおいては規範としての健康は個々人の感覚にかかわるものとなり、それを端的にあらわすものとしてフィットネスが挙げることができる。それは個々人的な体験であるため、間主観的な比較や客観的な計測はできず、人々のあいだで共有される言葉もなく、しかも上限が無く、さらに没入と自己放棄であるべきプレイヤーが同時に距離をおいた覚醒した判断者であるトレーナーやディレクターでもあるほかないということにおいて個々人は散漫で焦点の定まらない不安を抱える。これはきわめてポストモダン的な不安であるとされる。

[解説]

今回紹介するのはドイツのフランクフルト（アム・マイン）大学の文化人類学＝ヨー

ロッパ・エスノロジーの教授イーナ=マリーア・グレヴェルスの講演である。はじめに書誌データを挙げる。

Ina-Maria Greverus, *Performing Culture. Feldforschung männlich – weiblich – menschlich*. In: Christel Köhle-Hezinger, Martin Scharfe, Rolf Wilhelm Brednich (Hrsg.), Männlich. Weiblich. Zur Bedeutung der Kategorie Geschlecht in der Kultur. 31 Kongreß der Deutschen Gesellschaft für Volkskunde, Marburg 1997. Münster [Waxmann] 1999, S.75–98.

これからも知られるように、ドイツ民俗学会の第31回大会が1997年にマールブルク大学で「男と女：文化における性差カテゴリーの意味をめぐって」をテーマにして開催されたときに行なわれた講演で、2年後に大会の発表記録として印刷された。また講演のタイトルは直訳すると「パフォーミング・カルチャー：フィールドワーク ―― 男と女と人間」である。

*

論者のイーナ=マリーア・グレヴェルスは1929年8月16日にザクセン州ツヴィッカウの生まれで、マールブルク大学で民俗学（フォルクスクンデ）を学んだ。当初は口承文藝を手がけ学位論文はグリム兄弟の昔話に関するテーマであったが、次第に文化人類学に関心を移し、特に同時代のヨーロッパ・エスノロジーの開拓者の一人となった。1974年にフランクフルト大学が民俗学の分野に正教授ポストを設けると共に、学科を主宰し、またその教員・研究者組織「文化人類学／ヨーロッパ・エスノロジー研究所」（Institut für Kulturanthropologie und Europäische Ethnologie）を創設した。本稿は1997年に女史の定年退官をも記念して行なわれた企画にちなみ、女史にとっては勉学と研究者としての出発点となった場所での招待講演であった。

グレヴェルス女史とその仕事については、予て紹介を考えながらチャンスを得なかったが、遅ればせながら片鱗ではあれ日本に伝えることになった。ドイツ民俗学界における女性研究者のパイオニアの一人であるが、また性差に拘わらず一方の学問傾向の代表者でもある。本稿が一層の関心につながればと願っている。なお本誌の別稿としてやや詳しい解説をほどこしたので、参照していただければ幸いである。

本稿の訳出にあたっては、イーナ=マリーア・グレヴェルス女史と論集の版元であるヴァックスマン社の好意を得たことを付記する。　20. Aug. 2013 / S. K.